

の石材を入津していたことから起っているような説明になっている。

河内の白鳥陵といえは、讃岐にも白鳥神社があり、ともに日本武尊にちなむ因縁の地である。その河内の白鳥陵に造営した日本武尊の神殿―伊岐宮に讃岐の石を運ばせたというわけなのだ。

また、日本の正史である三代実録には、陽成天皇の元慶元年（八七七）都の大極殿造営に当って、讃岐の国人の民徭（みんよう）―労力奉仕する一種の課役―として讃岐の石を平安の都まで運ばせたことが記されている。

このように讃岐の石は、遠く都の方にまで運ばれて、建設資材に利用された古い歴史を持っている。ただ残念ながら、今のところ讃岐のどこの石か―どんな石か―それがわからない。遠く積み出されていた讃岐の石の歴史は古いのだ。

十六 和泉石

誰もが、つい気にもとめないで、うかつに眺めている、川原の礫や、讃岐平地で、

いたるところに転がっている路傍の石ころ―その大部分が、実はこの和泉石なのである。

おそらく、この石程、礫となつて讃岐全土に広く分布しているものはあるまい。何分にも讃岐全土の水源となる阿讃国境の讃岐山脈―その山がすべて、この和泉石から出来ているので仕方がない。流下に当る讃岐の平地がその礫片や砂土をかぶつたから当然である。

灰白色の見た目にもはえない石だ。「讃岐にきれいな石が少い！」などといわれるのも、実は余りにも多いこの和泉石の礫片が目につき過ぎるせいでもあろう。

大阪と和歌山の境を走る和泉山脈から、淡路の南を通り、讃岐山脈へと続き、西方は伊予の海岸づたいに、松山の南西海岸に延びる一連の山なみ―それがみなこの和泉石の山だ。

この石は、古生代白亜紀―その時代の海に堆積された砂岩なのである。だから所によって古代アマモ（アヤメ石）アンモナイト、イノセラム、ウニ、三角貝な

どという、当時の海棲生物の化石が見つかる場合もある。礫岩や泥の固った泥板岩、頁岩なども介在しているが、大部分一固結した砂岩である。

和泉は国名で今の大阪府の南部、この和泉国の南部に和泉山脈があり、その地方を俗に「泉南」と呼ぶが、古くから採石が行なわれ、石工の多い土地柄である。

ことに泉南の日根郡地方は古代から石作りの里として有名だったから、そこを出される石を和泉石と呼んでいたのだ。

「興地通志和泉国之五」（原文は漢文）に、「日根郡鳥取の荘、下の荘、箱作村に多く出す、色は青白く、石理は密である。姓氏録に垂仁天皇の皇后、日葉酢姫（ひはすひめ）が、崩じた時、和泉の人、この石で石棺を作って献上し、石作大連（いしづくりのおおむらじ）の姓を賜る今もこの石は石碑に作るに用いる、世にこれを和泉石と称す」

とある。その古い由来はともかく、和泉石の名は国名から出ているのだ。

淡路島では、俗言で「青石」と呼び、阿波の撫養地方では、地元の名をつけて、

「撫養石」とも呼んでいる。しかし、讃岐では別名や方言もなく讃岐に出る石ながら、讃岐石などともいわずに、昔から和泉石と呼んでいた。「池普請見積其他心得書」という藩政時代の手写しの心覚帳が、鎌田共済会博物館に所蔵されている。内容は池普請に関する技術的なことが書かれ、その中に、池普請用いる石の坪当りの見積を次のように記して、

石、壹坪付数

- 一、四千六百七拾メ目 和泉石
- 一、四千三百二拾メ目 庵治石
- 一、三千八百四拾メ目 由良山石
- 一、三千四百六拾メ目 船岡山石
- 一、三千三百九拾メ目 白粉石

とある。これを見ても讃岐では昔から和泉石と呼んで、この石を池普請の石材に多く利用していたことがわかるであろう。

岩石学などの知識はなくても、職によつて賢しである、石工は讃岐の石ながら、その石肌や石理を会得して、これが世に知られた和泉石―のそのものであることを知っていたためであろう。

それに讃岐には昔から、泉州、大阪方面からの石工が、その技術をもつて、可成り移住している事実もあるから、それらの人々が、讃岐にあるこの石を、和泉石と呼んだためでもであろう。

それはともかく、讃岐の石どころ、庵治や牟礼あたりには、和泉と名乗る姓の者があり、しかも庵治の採石業や加工業にその技術を生かしている者が今も多いという。

その和泉姓の人達の祖先は、和泉の国から移った人々である。

事実高松藩が、屋島に東照宮を造営した時などは、藩が和泉石の採石業の盛んな泉南地方の、すぐれた石工を招いて移住させている。

朝日新聞掲載の「庵治石このごろ」に、その昔、庵治石は硬いがゆえに、細工

がむつかしく、庵治石は加工の技術で、むしろ後進地であったという。明治十二年の記録には、庵治石を「讃岐で上等、ただし、和泉石よりは一等下につく」とされていた。

と、書いているが、事実その通りで、明治以前には、よく石碑や墓石に利用されたものだが今では花崗岩―こと庵治石に押されて、讃岐では何のねうちもない石のようになっていく。

石材も、その時代の加工技術の程度で、利用価値が変わってゆくのであろう。軟かい凝灰岩室の豊島石―砂岩の和泉石―花崗岩―磨かれた美しい庵治石―と、田舎の墓地に立って石材としての墓碑をながめただけでも、その移り変わる事実がわかり、時代の変遷が感じられる。おそらく、明治以前には石材として和泉石の価値が高かったであろう。

古い昔の庶民などには墓石すらなかった。藩政時代にも貧しい者の多くは、川原に転がる和泉石を、そのまま用いたものだ。

垂仁天皇の皇后さまの石棺に作ったというこの石は、今も和泉国で石碑や墓碑の材石として用いられて、「和泉石」と呼ばれている。

ところが、和泉の国に限らずこの石は讃岐山脈をはじめ、広く瀬戸内海後方の山地に分布するので、この同質の地層を名づけるのに、この和泉石の名をとって、地質学上、和泉層、和泉砂岩層、などと呼ぶようになったのである。

そして、単に和泉石と呼んだのでは、和泉の国の石という意味にも考えられるおそれもある。それで現在では、和泉砂岩とその岩質をあらわす呼称で呼んでいる。これが教科書的な地質用語になっているのだ。

話は変わるが、石はよく宗教的な対象になるものだ。「石神さん」などというの
は勿論のことだが、神社のご神体に石をまつるものが随分多い。しかも讃岐では
お国柄というのか和泉砂岩の円礫―それが御神体になっている。

「己巳きし晒の日誌」というのがある。これは志度の松岡調氏の日誌で、己巳は明治

二月の干支ママ廻えとは乃の字に相当するから、明治二年の日記である。

松岡氏は幕末から明治初年にかけて国学者で、志度の神宮の家の人である。東讃はこの松岡氏、西讃ではこれまた当時の碩学、黒木欽堂氏―この二氏が官令を受けて、讃岐の神社を残すところもなく調査した。

目的は新政府の意図する神仏分離の主旨からであった。

神社でありながら仏教にまぎらわしいものをまつつてはないか、もしあれば早速それを取除かせ、仏寺に移させる。ことにご神体が時に僧形であったり仏具がまつられているような時は大変だから各地を廻って神社のご神体は、特に入念に調査することであった。後日の報告の材料にするためか、松岡氏は略画などまで交えて忘備ため書き留めている―それが実はこの己巳廻日記の内容である。それを見て驚くことは、いかに多くの村々にある各地の神社が、ご神体として石をまつっているかということである。しかも、その大部分が「円石」なのだ。

「丸い石で、ご神体が出来ているのは讃岐が全国でも著しく、全国随一である！」

と、草薙金四郎氏もその著書に書いているが、松岡氏のこの日誌を見ると、一層その感が深くなる。岩石が流下するにつれて磨かれ円礫になるのは当然だが、とくに均質な砂岩の特性として他の火成岩や変成岩と違って丸味を帯び易いもので、讃岐にはこの砂岩の円礫が多い。ご神体を一つ一つおがんだわけではないが、私はお国柄として、ご神体の円石は疑う余地もなく和泉砂岩と断定せざるを得ないのである。

十七 由良石

皇居の前広場の敷石として、この石が出されたのは人の知るところである。今は高松市になった、もとの川島町―そのすぐ北に独立した小円頂丘の山がある。これが由良山といわれ、由良石の出る山だ。

山の北側と南側に、採石のあとが、柱状節理を示し、山上と山下に繁る松の緑―その中間に岩石が断崖となっていて、誰の目にも、すぐ採石場であることがわ